





Thom Jones トム・ジョーンズ

『サロン・ドット・コム 現代英語作家ガイド』(ローラ・ミラー、アダム・ベグリー/編 柴田元幸/翻訳 研究社)とが『月曜日は最悪だとみんなは言うけれど』(村上春樹/翻訳 中央公論新社)とが読んでも結局はつきりしない経歴を適当にまとめると、一九四五年アメリカ、イリノイ州オーロラ生まれ、アマチュアボクサー時代の怪我による側頭葉痲痺を持つ。海兵隊を除隊後、ハワイ大学、ワシントン大学を経てアイオワ大学の創作科に入学。その後新聞記者やコピーライター、学校の用務員などの仕事を転々としながら小説を書きまくり、糖尿病やらアルコール中毒やら薬物濫用やらを抱えながらも一九九二年に短編『拳闘士の休息 The Pugilist at Rest』が雑誌『ニューヨーカー』に掲載されて鮮烈にデビュー。この作品は九三年度のO・ヘンリー賞を受ける。処女短編集『拳闘士の休息』に収められた『私は生きたい!! Want to Live!』はジョン・アップダイク(John Updike)が編集した『二十世紀のアメリカのベスト短編集 the best American short stories of the century』の一本に選ばれている。新潮社から発売された岸本佐知子さんによる素晴らしい翻訳の『拳闘士の休息』は残念ながら二〇〇三年十二月現在絶版。他に短編集『コールド・スナップ cold snap』と『ソニー・リistonは俺の友達だった Sonny Liston Was a Friend of Mine』がある。アマゾン・コムでthom jones名義で検索できる『Way Down Deep』がトム・ジョーンズの第一長編なのかどうかは確認してません。(現在 OUT OF STOCK)

COLD SNAP by Thom Jones
Copyright(c)Thom Jones 1996 THE WYLIE AGENCY UK,LTD.

コールド・スナップ

著/トム・ジョーンズ
訳/舞城王太郎

Illustration / 舞城王太郎

●本文使用書体/舞城王太郎×Thom Jones 専用書体
書体製作担当/字游工房

舞城王太郎、渾身の初翻訳は
伝説の作家、トム・ジョーンズの出世作。
世界出版史上“初”となる
「舞城王太郎×Thom Jones 専用書体」×「凸版印刷」
が撃ち出す究極のドライブ感!
“ゼロの波の新人”のトップランナーが扉を開ける、
“ぼくたちの時代の海外文学”はここからはじまる!

クソつたれのポケってなもんだ。急な寒波コールド・スナッフがやってきたから俺はおらーつと家中の水道を流しっぱなしにする。俺のウチは、ウエストコーストのこら辺の大体のウチと同じように、「本物」じゃないからだ。窓は上げ下げするやつじゃないし、地下室も（これは屋根裏とはまた別の形でパイプを守ってくれるんだけど）ないし、オークとかエルムの木がいい感じで対になって立ってるようなサイドウォークも、こら辺のウチの玄関の正面にはついてない。古き良き中西部の家ならそういうの持つてるもんなんだけどな。こら辺だと窓は右左だ。地下室なんかなくてサイドウォークもちゃんとした木もなくて、あるのはエバーグリーンだけだ。そこで寒波と雪がやってきた日にやあ、誰も何もいったいどうししたらいいか分かんなくなる。インチ雪が積もったくらいであつさり学校休んでしまいうし地域一帯大混乱だ。「助けて！一人じゃどうしようもないの！」。ふう。たまには寒波も結構じゃないの。寒いのもそんなに悪いもんじゃないと俺は思うぜ？おかげで蚊とかノミとか全部かちんと凍っちゃうだろうし、それに何より、俺が思うにどんな変化もまあ何か意味があるもんなんだ。あと、ひよつとしたらこの寒波のおかげで俺はアフリカ脱出以来のこの重苦しい鬱病うつ病から抜け出せるかもしれない。ああもうホント、俺はマジで鬱入ってるのだ。俺は午前三時に目覚めてああやべえ、パイプが破裂するよと思う。それで俺は水を流して水道からは水滴すいてきが落ちるようにしといて外に行つて表にある蛇口の方もひねつて水を流しておく。こいつらが一番弱いんだよな……ああやっぱり、こいつらは全部

凍りかかっている。俺はぎりぎり間に合つてそいつらを何とかしてやる。良かった良かった。つて言うのも、今の俺の状態じゃとてもじゃないけど壊れたパイプなんて直せねえからだ。俺はアフリカで原住民相手の医者とかやつてマリアのキツいやつにやられて三十ポンドも体重落としてアフリカから帰ってきたところなのだ。まあでもグローバル・エイドの奴らが俺を家に帰らせたのは躁状態躁の俺がやらかした大騒ぎのせいだった。それはこれまで一番最悪のドカーンだった。リチウムもらつて酷い乾癬かっせんになつて俺はまるでワニ男みたひになつた。躁病には確かにテグレトールを飲めばいいけど、俺はそれで俺の白血球のトータルを酷い状態にしてしまったし、ほとんど死にかけてしまった。そこで俺が完璧復活して、そこからやりたかつたことは、モルヒネをちよつとはかし皮膚の下おとこにぶくつと注射してやることだった。俺はそれをガロン単位で持つてたし、それは俺を大人しくしておいてくれるし、酒とは違って、俺はそれをコントロールすることができたのだ。それでも、まあちよつと言つておかなくてはいけなのだが、俺はアメリカでは財産を食いつぶして医師免許を剥奪されていたし、ちよつとそれがほこりをおかぶつたくらいのところだ。グローバル・エイドともおさらばすることになった。神の意志だよな、マジで。運命つてもんだよ。それかカルマとか、何でもいいけど。まあ躁鬱病つてもアフリカだつたらわりといいもんだ。やる気つてもんを与えてくれるし、それに地面に両足くつつけてれば何でもできる。……ナイロビにいるケニアの大統領んところの芝生しげふの上で裸はだかでパレードと